

新聞コラム・テレビ番組を用いた要約の指導

松崎 史周

1. はじめに

情報化社会への対応が強調されるなか、コンピューターや映像機器などを活用して情報を発信したり、各種メディアを活用して情報を的確に収集・選択・吟味したりできる能力の育成が求められている。このような流れを受けて、国語科ではここ数年、メディアリテラシーの育成を目指した授業が数多くなされるようになってきた。

国語教育誌に掲載される授業実践を見ると、ビデオカメラで録画して番組を作成したり、パソコンを用いてホームページを作成し公開したりと、メディア機械を用いて情報を発信する授業が多く見られるが、その内容は活動の報告に終始していて、実際にどのような国語力が養われ、どのような国語力が身に付いていったのかの検証が十分になされていないように感じる。もちろん筆者もメディア教育の必要性を感じており、メディアから提供される情報を批判的に見たり、メディア機械を駆使して効果的に表現したりといったことを、自身の授業でも実施していきたいと思っている。だが、現在受け持っている生徒の国語力を見ると、いきなり情報分析や番組作成に入っているものなのかと疑問を感じてしまう。

ここ数年、国語の授業を行いながら、生徒は教材の文章を理解しているのだろうか、教材の文章に主体的に向かい合っているのだろうか、不安を感じることもある。実際に、授業の途中で文章の内容を尋ねてみると、ほとんど理解できていないことが分かったり、定期テストで文章の要点に関わる問題を出してみると、正反対の内容を書いたりすることが多くなってきた。このような状況を踏まえて、授業の導入に工夫を加えたり、指導の重点を明確にしたりと授業の改善を図ってきたが、教師主導の指導と受け身の学習からは抜け出してはいないし、個々の生徒の関心を踏まえ

て多様な教材を提供できているわけでもない。より一層の授業改善が必要なことはもちろんだが、それと合わせて、低下している生徒の国語力を回復させる手立ても考えなくてはならない。

このような問題意識から、メディアを活用しながらも生徒の国語力を育成していく指導ができないものかと考え、今年度は新聞コラム・テレビ番組を用いて要約文を書かせる指導を行ってきた。本稿は、新聞コラム・テレビ番組を活用した要約文作成の指導を報告し、身近なメディアを活用した指導のあり方を提案するものである。

2. 教材としての利点

では、多種多様にあるメディアの中で、新聞コラム・テレビ番組を取り上げる理由は何か。これらのメディアの教材としての利点を述べていくこととする。

2.1. 新聞コラムの利点

新聞記事を利用する動きはN I E（教育に新聞を）運動の広まりとともに国語科でも一般化しつつある。新聞を授業に活用することで、新聞に親しみを持つことができ、積極的な学習態度が身につくと期待されている。筆者も新聞の教材としての利点は大きいと考えるが、新聞は生徒にとって身近でありながら疎遠なメディアとなっている。その理由として、生徒の興味がテレビやインターネットに向いていることもあるが、社会問題に対する知識が乏しいゆえに記事の内容が理解できず親しみが持てないことも挙げられよう。もちろん自分に不足した知識を補充する手段の一つに新聞があるのだが、社会問題に関心が薄い生徒にとって政経・国際面の記事や社説は読むこと自体が難しい。

そこで、いきなり一般記事や社説ではなく、朝刊コラムを教材とすることで、生徒の抵抗感を少なくし、徐々に新聞に慣れさせていくこととした。朝日新聞なら「天声人語」、信濃毎日新聞なら「斜面」だが、時事的な問題を扱いながらも無駄のない簡潔な文章で、文章の要点を正確につかみ、分かりやすく表現する力を伸ばすのに適した教材である。少々抽象的で行間が大きいようにも感じられるが、その分、文章の要点を押さえて作文し

たり、語句や語順を代えて要約文を作成したりする力が育成できる。

2.2. テレビ報道番組の利点

テレビ番組は新聞と違って「観る」「聞く」力が必要とされる。特に、ニュースや報道番組は必要な情報を正しく得るために要点を押さえることが必要であり、これらを教材にすることで、メモを取ったり情報を選別したりといった総合的な国語力を養うことができる。

ところで、ニュースは素早く情報を得ることができるという利点があるが、報道番組に比べると「事件の報告」という側面が強く、問題の背景や原因などの検証が不十分である。小論文の材料を集めたり、社会問題に関する知識を得たりするためには、報道番組の方が適していると言えよう。報道番組も様々な番組が放送されているが、検証が的確で要領よくまとめられているという点から、筆者はNHKの「クローズアップ現代」を取り上げることとした。

クローズアップ現代は日替わりで様々な社会問題を取り上げており、短い時間で効率的に理解できる構成となっている。普段からこの番組を観ている生徒はほとんどいないが、比較的観やすいこの番組を取り上げることで、ニュースや報道番組に親しみを持たせ、自らの進路に関わる情報を自主的に収集していく習慣を作っていくことができると考える。

以上、新聞コラム・テレビ報道番組を取り上げた理由を述べてきたが、これらは社会問題を的確に理解しつつその要点を書き記したり、メモを取りながら要点を掴んで書き記したりする力を育成するうえで実に有益なメディア教材である。このような認識のもと、国語総合の授業の中でこれらのメディアを取り上げ、夏期休業以後の授業で実際に指導を行ってきた。

3. 新聞コラムの要約の指導

1) 指導目標と計画

新聞コラムは朝刊一面に掲載されるコラムで、その文章は名文の代表格と評価されている。約750字にまとめられた簡潔な文章、起承転結の分かりやすい構成、適切で含蓄のある語や文、時代の有り様を映し出すタイムリーな話題など、新聞コラムが名文とされる理由はいくつも挙げられる。

入学試験や入社試験に採用されることも多く、国語の教材として用いられることも多い。

今回、新聞コラムの要約の指導を行うにあたって、次のことを指導目標とした。

【指導目標】

(1) 新聞コラムの要点を正確に掴み、的確な要約文を作成することができる

(2) コラムの内容に関して感想や疑問を持ち、自ら課題を持つことができる

要約文作成の手順・方法の説明は授業で行い、作業は週末の課題として家庭で行わせた。指導の計画は次の通りである。

【指導計画】

第1時 新聞コラム要約の方法を説明し、家庭で行う課題の説明を行う

▷ 週末課題 (要点を掴みやすい) 新聞コラムの要約文を作成する

第2時 生徒の文章を示しながら、要約文作成のポイントを説明する

▷ 週末課題 (時事問題を題材とした) 新聞コラムの要約文を作成する

第3時 生徒の文章を示しながら、時事問題について考える

※ 以後は週末を中心とした自主課題 (月に2・3回を目安として)

第3時以降は生徒の自主学习とし、作成した要約文は筆者が確認・添削をし、生徒に返却していく形を取った。日々家庭に配達される新聞を題材とすることで、教材の自動提供・学習の自動化を図り、主体的な学習の習慣作りも合わせて目指している。

2) 要約の手順と方法

中学生の時に新聞コラムや社説の要約を勧められた生徒は多いが、要約の仕方を教えてもらった生徒はいうとごく僅かである。ほとんどの生徒は「要約しなさい」と言われるだけで、実際の作業は苦勞しながら独力で行ったようだ。そこで、授業では例を挙げながら新聞コラムの要約の方法と手順を紹介し、手順に従いながら要約文を作成させた。授業で提示した要約の手順は次の通りである。

【要約の手順】

(1) 文章を通読して結論を見つけ、文章を幾つかのブロックに分ける

(2) 命題を構成する語句を選び出し、組み合わせて要約文を作り出す

(3) 語句を代えたり語順を変えたりして文章の流れを整える

文章の結論が文中にない場合は内容を踏まえて自分でまとめることにな

るが、その際は文章の形でなく連体修飾を含む比較的短い語句でまとめる方が望ましい。抽象的な語句でまとめることで文中から語句を選び出す際の「基準」にすることができるのである。

ところで、一般に要約の方法は「縮約法」と「肉付け法」の2つに分けられる。縮約法とは、長い本文の不要な部分を取り除き、表現を削り、要求されている字数まで徐々に情報を削減していく方法である。一方、「肉付け法」は、本文の内容の中核的な部分を取り出し、要求されている制限字数になるように、必要に応じて内容を付け加えていく方法である⁽¹⁾。授業では、一般的に用いられ、生徒にとって取り組みやすい「縮約法」を採用し、重要度の低い連体修飾部を削りながら命題を構成する語句（主語・補語・述語）を選び出して短文を形成させ、複数の短文を組み合わせる複文にし、語句（指示語や文末表現）や語順を調節して文章の流れを整えて要約文を作り上げさせた。

以上が要約の手順であるが、例を挙げると次のようになる。

【要約の実際】

(2-1) コラム例：「天声人語」2005.8.4

昨日の朝6時ごろ、出張先の宿で目が覚めた。朝刊を手にテレビをつけると、飛行機が燃えている。カナダの空港に着陸した直後のエールフランス機だという。垂直尾翼が地面近くから突き出ている。胴体は壊れたのか、ほとんど見えない。黒煙が上がる。

大惨事かと思ったが、幸い、そうではなかった。300余人全員脱出、死者なし、けが人は軽傷、などと続報が流れた。滑走路からオーバーランし、衝突、炎上で結果がこれなら、よほど幸運が重なったのだろう。カナダの運輸相は「奇跡としか言いようがない」と述べたという。

上掲(2-1)は当日のコラムの最初2段落であるが、この部分は“筆者がテレビで航空機事故の様子を観たこと”が述べられている。そこで、まず命題を構成する語句でこの点に関わるものに下線を引いていく。

(2-2) 命題を構成する語句を選び出し下線を引く

昨日の朝6時ごろ、出張先の宿で目が覚めた。朝刊を手にテレビをつけると、飛行機が燃えている。カナダの空港に着陸した直後のエールフランス機だという。垂直尾翼が地面近くから突き出ている。胴体は壊れたのか、ほとんど見えない。黒煙が上がる。

大惨事かと思ったが、幸い、そうではなかった。300余人全員脱出、死

者なし、けが人は軽傷、などと続報が流れた。滑走路からオーバーランし、衝突、炎上で結果がこれなら、よほど幸運が重なったのだろう。カナダの運輸相は「奇跡としか言いようがない」と述べたという。

航空機事故に関わり、その様子の説明に必要な語句には下線、筆者の行動と感想に当たる語句には二重線を引いた。なお、点線は事故機の詳細を説明している部分である。

では次に、選び出した語句を組み合わせて短文を形成する。

(2-3) 選び出した語句を組み合わせ、短文を形成する（筆者作例）

昨日の朝、テレビを観た。飛行機が燃えている。カナダ空港に着陸した直後のエールフランス機だ。大惨事かと思ったが、300余人は全員脱出した。死者もなし。けが人は軽傷だった。滑走路からオーバーランし、衝突、炎上した。カナダの運輸相は「奇跡だ」と述べた。

コラムを含めて新聞記事は紙幅の関係もあって、体言止めが多く用いられている。そこで、太線のような述語を補って短文を形成していくとよい。最後に、語句や語順を調節しながら文章の流れを整えていく。

(2-4) パラフレーズして文章の流れを調える（筆者作例）

昨日の朝、着陸の際に滑走路をオーバーランし、衝突・炎上したエールフランス機の様子をテレビで見た。大惨事かと思ったが、300余人は全員脱出、死者はなし、けが人は軽傷だった。カナダの運輸相は「奇跡だ」と述べた。

以上、例を挙げながら要約の手順と方法を説明したが、作業を適切かつ効率的に行うためには、主語・述語・補語など文の成分をよく理解し、これらを適切に抜き出せる必要がある。そこで、要約の授業に先立って、文の成分や文の構成など文法の指導を行っていくのが良いだろう。文法の知識が表現に役立ち、実際に使える知識であることを生徒に実感させるためにも、要約指導を文法指導と連携する形で進めていくようにしたい。

3) 生徒の文章と授業でのフィードバック

要約の仕方を説明した第1時では比較的要点の掴みやすい次のコラムを用いた⁽²⁾。

【天声人語：1999年4月1日】

① ある会社に、外部の警備会社からガードマンが派遣されていた。社屋を見回って防火、防犯に努め、玄関では朝夕、社員たちを送り迎えした。

- ② 長年勤務したガードマンの1人が定年で退職することになり、会社の関係課がささやかな慰労の会を催した。お礼のことばを、と立ち上がった老ガードマンは「一つだけ、ちょっと悲しいことがありました」と言った。「出勤し、退社する社員の皆さんに、私はいつも声をかけました。おはようございます、お疲れさまでした、と」
- ③ 「あいさつをかえしてくださる方は、でも、10人に1人だったでしょうか。みなさん、黙ったまま通り過ぎる。仕事が大変なことは、むろん、よくわかっているのですが。」厳しいけれど、温かな指摘だった。一同、セキとして声なし。それぞれ、身に覚えがあった。
- ④ 高速道路の料金所。「ありがとうございました」「ご苦労さま」などと車の中に声をかける係員が多い。しかし、車の中からの返事はなかなかない。その点、先日同乗させてもらった友人一家の対応は気持ちがよかった。運転していた友人が「ありがとうっ」、後ろの席の2人の娘が「ご苦労さまですっ」。元気に応じていた。
- ⑤ 朝は「おはよう」、夜は「おやすみ」。あいさつは人間関係の潤滑油だ。忙しいほど、ストレスが強いほど、潤滑油は効果がある。ところがいまの世の中、その油が切れがちで、人と人の間がきしむ。商談ではもみ手の男たちも、家へ帰れば「フロ、メシ、ネル」。
- ⑥ 国際関係だって、あいさつ一つで感じが変わる。某国の首脳がこの間、訪問国でデモの洗礼を浴びた。首脳は怒気をふくんで、相手の首脳に「自分の国さえコントロールできないんですか」。これでは迎える方もやる気がなくなる。もっとやわらかく、にこやかに。
- ⑦ 以上、自戒も込めて、きょう新しく社会に巣立つ人たちへ。

では、授業で説明した方法に従って生徒が作成した要約文の例を挙げる。

【週明けに提出された要約文】

外部の警備会社から派遣されていたガードマンの一人が退職することになって、慰労会で「出勤し、退職するみなさんに私はいつもおはようございます。お疲れさまでしたと声をかけました。しかしあいさつを返して下さった人は10人に1人でしょうか。みなさん黙ったまま通り過ぎる。それが一つだけ悲しかった。」と言った。それぞれに身に覚えがあり、厳しくも暖かい指摘だった。

あいさつは人間関係の潤滑油だが、今の世の中はあいさつが切れがちで人と人との間がきしむ。

以上、自戒も込めてきょう新しく社会に巣立つ人達へあいさつの大切さを伝えたい。(260字)

この要約文は260字と短くまとまっているが、語順の変更はあるものの会話文がほぼそのまま使われており(点線部)、冗長性が解消されず字数

もさほど減っていない。また、高速道路の料金所でのエピソードとデモに遭って怒った首脳のエピソードが要約されておらず、コラムの内容を全て押さえた要約文になっていない。

そこで、第2時には要約文作成の際の注意点として次のことを説明した。

【要約文作成の際の注意点】

(1) 会話文はそのまま使わず、要点を押さえて作文をし、地の文に組み入れる

(2) 字数のバランスを取りながら、各段落の内容を押さえた要約文を心がける

この説明を踏まえて、生徒には各自のノートに書き直しを行わせた。次は上掲の生徒が書き直した要約文である⁽³⁾。

【書き直しをした要約文】

ある会社で警備会社から派遣されていたガードマンが定年退職することになり、ささやかな慰労会が催された。その席でそのガードマンは朝夕社員たちにあいさつをしたが返事がなく残念だったと述べた。皆身に覚えがあり、声も出なかった。

高速道路の料金所で声をかける係員は多いが返事はなかなかない。その点、友人一家は元気に応じていた。

忙しくストレスが強い程あいさつは効果がある。あいさつは人間関係の潤滑油だが、今の世の中その油が切れがちで人と人の間がきしむ。

某国の首脳が訪問国でデモの洗礼を浴び、怒って相手の首脳に自分の国もコントロールできないのかと食ってかかった。これでは迎える方もやる気がなくなる。国際関係もあいさつで変わる。

以上、きょう新しく社会に巣立つ人たちにあいさつの大切さを伝えたい。
(338字)

第2時以降は週末を中心として自主的に取り組ませ、作成した文章は添削を行い返却した。次に代表的なものを挙げる。

【生徒が選んだコラム：「斜面」2005.9.19】

伝説では、赤ちゃんを運んでくるのはコウノトリだ。日本は出生率が低下している。鳥に機嫌を直してもらわねば…。そんな中で、兵庫県豊岡市の「県立コウノトリの郷公園」が人工繁殖した鳥を試験的に自然放鳥する。

体は白、翼の多くの部分は黒く、脚は赤い。明治期に急減した。特別天然記念物になっている。日本の野生のものは消滅した。原因は、生息域の破壊、農薬使用などだ。豊岡市は最後の生息地とされ、旧ソ連からもらった幼鳥を元に人工繁殖を進め、今では百羽以上になっている。

野生に戻すには、餌のドジョウやカエルの生息できる田んぼや川が必要だ。

巣となる高い木が茂る林も欠かせない。時間をかけ、ふさわしい環境を整えてきた。自然に適應できるよう鳥の訓練をしてきた。最初に放鳥するのは五羽という。行動調査のため、発信機を装着した。段階的に自然に戻していく。

トキも似た運命をたどる。新潟県佐渡島で日本産最後の「キン」が死んだのは一昨年だ。環境破壊などにより失ったものの大きさを痛感する。保護センターでは、中国産トキが順調に増殖している。これを自然放鳥する計画だ。どちらも成功につなげてほしい。

赤ちゃんを運んでくるのは伝説に過ぎなくても、コウノトリが安心してすめる環境は、人の生活にもいいはずだ。自然環境を見直す機会にもなる。二十四日が初放鳥という。公園はホームページで、「あと〇日」と示している。羽ばたきの具合はどうだろうか。(596字)

【生徒が書いた要約文①】

県立コウノトリの郷公園が人工繁殖した鳥を試験的に自然放鳥する。コウノトリは明治期に急減した。原因は、生息域の破壊、農業使用などである。コウノトリの最後の生息地では人工繁殖を進め、今では百羽以上になっている。野生に戻すには、餌のドジョウやカエルが生息できる田んぼや川が必要。また、巣となる高い木が茂る林も必要となる。時間をかけて環境を整えてきた。自然に鳥をだんだん慣らして適應できるようにしてゆく。コウノトリと同じように、トキも似た運命をたどる。トキは一昨年に日本産最後のキンが死んだ。環境破壊などにより、たくさんのものを失ってしまったのだ。今、保護センターでは中国産では中国産トキが順調に増殖している。自然に戻すのが目標だ。コウノトリが安心してすめる環境は人の生活にとっても良いものだ。そして、環境を見直す機会でもある。(362字)

【生徒が書いた要約文②】

伝説で赤ちゃんはコウノトリによって運ばれる。しかし、コウノトリは明治期に急減し、今は特別天然記念物になっているが、日本にいる野生は消滅した。原因は、生育域の破壊や農業使用など。そんな中、兵庫県豊岡市では、試験的に自然放鳥することが決定した。初放鳥は9月24日に5羽を放鳥する。しかし、野生に戻すには、餌の生育場所や巣となる高い木が茂る森が必要だ。これに関連し、「トキ」も似た運命をたどっていて、一昨年日本産の最後のトキが死んだ。今では、中国産のトキも順調に増加しており、放鳥する予定になっている。この2種の放鳥は、自然環境を見直す良い機会だと思われる。(278字)

現在のところ、生徒の取り組みはあまり積極的ではないが、自主的に行ってくる生徒が徐々に増えてきた。定期的に提出する生徒の要約文は明ら

かに出来が良くなってきており、それに伴って要点の把握力も向上しているように感じられる。今後はより多くの生徒が取り組むよう、総合学習や進路指導も含めて様々な機会を用いて、要約文作成の効用を生徒に説いていきたいと考えている。

4. テレビ報道番組の要約の指導

1) 指導目標と計画

クローズアップ現代は平日（月曜～木曜）の午後7時30分からNHKで放送される30分の報道番組である。現場感溢れる情報性の高いリポートと多彩なゲストによる核心を突くコメント、そして国谷裕子キャスターの鋭い視点が番組の売り物だが、世情に俊敏に対応しつつも様々な社会的問題に鋭く切り込み、生徒に‘現在’を考えるための視点を与える教材として非常に有効な番組である⁽⁴⁾。

今回、番組の要約の指導を行うにあたって、次のことを指導目標とした。

【指導目標】

- (1) メモを取りながら番組の要点を正確に掴み、的確な要約文を作成することができる
- (2) 番組を通して未知の知識を得ると共に、疑問を抱いた事柄を自ら調べることができる

授業ではメモの取り方を説明した後に、実際に番組を観ながらメモを取らせ、文章にまとめる作業は週末の課題として家庭で行わせた。指導の計画は次の通りである。

【指導計画】

- 第1時 メモの取り方と注意点を説明し、実際に番組を観ながらメモを取る
▷ 週末課題（要約文を作成する要領で）メモをまとめながら文章化する
- 第2時 生徒の文章を示しながら、社会問題を分析する観点を紹介する
※ 以後は週末を中心とした自主課題（月に1～2回を目安として）

第2時以降は生徒の自主学習とし、作成した文章は筆者が確認・添削をし、生徒に返却していく形を取った。新聞コラムと同様、毎日放送される番組を題材とすることで、教材の自動提供・学習の自動化を図り、主体的な学習の習慣作りも合わせて目指している。なお、NHKのホームページには番組のページが設けられており（<http://www.nhk.or.jp/gendai/>）,

各日の内容が300字程度で掲載されている。生徒にはこのページも紹介し、番組紹介を参考しながら、自ら作成した文章を自己採点することも勧めた。

2) 番組の構成とメモの取り方

クローズアップ現代は、前半では現状を報告しつつ問題の所在を明らかにし、後半では問題の解決に向けてなされている対策を紹介するという構成になっている。もちろんどのテーマもこの構成になっているわけではないが、番組を観る際の心構えとしてこの構成を意識することは有効だろう。

そこで、前半のVTRでは、どのような問題があり、原因はどこにあるのかを、後半のVTRでは、どのような対策が採られ、どのような問題が残されているかを中心にメモを取っていけばよい。なお、番組冒頭のリードでは内容の紹介がなされているが、この部分が番組の要約となっているので、実際にメモを取る際にはリードを観ながら番組の概要を確認して心構えを作っておくようにする。

メモは語句や短文の形で行うこととし、VTRの説明の中から次の観点に関わるものをできるだけ多く書き出していく。

【メモを取る際の観点】

- (1) 現状の把握と問題の分析に当たる事柄（番組の前半）
- (2) 現在の対策と残された課題に当たる事柄（番組の後半）

この2つの観点は小論文の基本構成として筆者が授業で紹介しているものだが、たいていの社会問題はこの観点から捉えることができる。番組を観ながらメモを取る練習をすることで、社会問題を分析する観点を身に付け、これらの観点を取り入れながら小論文を書けるようにしていく。

3) 授業で扱う予定の番組とホームページに掲載されている番組紹介

メモの取り方を説明した第1時では2005年8月1日に放送された「空の安全は取り戻せるか」を用いた。相次ぐ航空各社のトラブルを取り上げたものだが、政治経済や国際関係に関わるテーマではないので、生徒にとっても比較的理解しやすいテーマかと思われる。

番組の概要はNHKのホームページ上に掲載されている。なお、この番組紹介は生徒が要約文を書いた後に、添削した原稿とともに生徒に渡した。

【ホームページ上の番組紹介】

8月1日（月）放送 空の安全は取り戻せるか

今年に入り日本航空や全日空など、日本の航空各社でトラブルが続発している。3月に業務改善命令を受けた日航は4月に改善措置をまとめたが、その後も車輪の脱落などトラブルはとまっていない。日航が独自に原因を分析した報告書によると浮かび上がってきたのが運航の「定時性」の問題だった。ライバル会社との激化する競争のなか、旅客機を定刻通りに飛ばそうとするあまり、現場に無理が生じているという調査結果がでたのだ。「定時性」の追求が結果として安全意識をおろそかにしたと報告書は指摘している。番組では「定時性」が現場でどのように追求されているのか、その実態をルポして、航空会社に課せられた安全と効率の両立の問題を描く。

(<http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku2005/0508-1.html>)

テレビを観ながらメモを取るという作業は予想以上に難しかったようで、多くの生徒が番組の進行の速さに追いつけず苦勞しながらメモを取っていた。第1時の授業は時間や機材の事情から番組の前半しか見ることができなかったが、番組終了後には作成したメモをもとにして要約文を書かせた⁽⁵⁾。

次に生徒が作成した要約文をいくつか挙げる。これら3人の要約文は比較的良くできている方だが、字数に違いが見られ、内容も多少違っている。

【メモをもとに作成した要約文】

〈生徒①〉

最近、航空機のミスが多発している。その原因の主は「定時性」である。時間を意識しすぎて安全性が欠けているのである。そのため、6月のタイヤ脱落をはじめ13件のトラブルが発生した。利用者を多く得るために定時性を守ろうとする乗務員たちに精神的なプレッシャーを与え、それがトラブルにつながり、このようにトラブルが発生している。経営統合をしても、それぞれが安全面についての考えをちゃんと共有していないことも問題である。時間へのこだわりによって、起こっている恐ろしいことだ。(230字)

生徒①の要約文は表現上のぎこちなさはあるものの、上掲の番組紹介と比べても遜色のないほど良くできている。問題の原因となる過度の定時性追求が確実に挙げられており、乗務員がプレッシャーを感じていること、経営は統合されても安全の意識は統合されていないことなど、番組の中で強調されていた事柄も挙げられている。不可欠な情報を着実にメモし、そ

こから要点を押さえて、要約文を作成する能力を持ち得ていると思われる。

〈生徒②〉

最近、航空機のミスやトラブルが多発している。それは航空会社が発着への時間のこだわり、定時性を現場に強く求めているからである。ミスやトラブルはこの半年で十三件起こっている。例を挙げると、部品やタイヤの脱落、許可なく滑走、緊急時ドア点検忘れなど間違えれば、大事故につながる事が多い。ではなぜこのような事態に至るのか。原因は一日に四〇〇便が運航されていて時間の重なる便もあるので整備士や客室乗務員は点検や準備を手早く行うことが求められているからである。慌ただしい時間との戦いで安全面が低下し、義務づけられていることも守っていないからです。もう一つの理由は時間通りにしなければパイロットが遅れのためにプレッシャーがかかり、機内でも焦りすぎてしまうからです。では、この定時性と安全性の両立は可能なのでしょうか。(350字)

生徒②の要約文は文章の途中で常体から敬体が変わっている(下線部→点線部)など表現上の問題点が見られるが、要約文としてはおおむね良くできている方であろう。ただ、番組で紹介された実例が取捨選択されずに列挙されており、要約文にしてはいささか冗長な感が否めない。また、経営統合されても安全意識が統合されていない問題点を挙げておらず、メモの取り落としが感じられる。不可欠な情報を漏らさずメモを取り、そこから要点を押さえて適切に要約文を作成する能力をより一層伸ばしていく必要があるだろう。

〈生徒③〉

今年、例年に比べて多すぎるほど日本航空のミス・トラブルが起こっている。それはタイヤの脱落・許可なしで滑走を始めるなど13件も起きた。

それらの原因は全てパイロットや客室乗務員らの時間的プレッシャーによるものであり、それは航空会社からの時間の圧力、定時性が影響していると思われる。そしてその時間的なプレッシャーにより安全への意識が薄れている。今、定時性と安全性を両立できるかが一番の問題である。

(198字)

生徒③の要約文は語順の不整や語句の欠落があり、文構成上の問題点が多く見られる。例えば、冒頭文の(1)は、波線部「例年に比べて多すぎるほど」の位置が悪く、読みにくく文意がすっと入ってこない。名詞句の直前にありながら連用修飾部の形を取っていることが原因である。そこで、

波線部を「例年に比べて多く」に修正して、述部の直前に置くことで、読みやすく文意を取りやすくしていくよい。

【文構成上の問題点がある文とその修正文】

(1) 今年、例年に比べて多すぎるほど日本航空のミス・トラブルが起こっている。



(1)' 今年、日本航空のミス・トラブルが例年以上に多く起こっている。

ここでは冒頭の文のみを取り上げたが、他の文も同様の方法で修正して文章の流れを良くしていく必要がある。ただ、経営統合による弊害には触れられていないものの、必要な情報はほぼ盛り込まれており、メモの取り落としは感じられない。不可欠な情報を漏らさずメモを取り、そこから要点を押さえて情報を取捨選択する能力は概ね身に付けているが、文構成や語句を整えて適切に要約文を作成する能力についてはより一層伸ばしていく必要があると考えられる。

このように、各生徒の要約文を丁寧に見ていくと、それぞれの生徒がどの国語力は身に付けており、どの国語力は不十分なのかが見えてくる。今後は全ての生徒の要約文を分析し、各生徒の国語力を把握し、それぞれの状況に応じてアドバイスをしたり課題を与えていったりしていくこととしたい。

5. おわりに

近年、ほとんどの大学・短大が推薦入試を導入しており、作文や小論文の学習を必要とする生徒の割合が急速に高まっている。筆者の勤務校も3年次に「国語表現II」を選択科目として置いており、小論文を書く練習から志望理由書の作成まで取り扱い、大学・短大の推薦入試では一定の成果を挙げた。だが、生徒の書く文章は年を追うごとに出来が低下しており、もはや国語表現の授業内だけでは十分な対策ができなくなってきた。

また、書く力の低下に合わせて、意欲の低下も感じられる。小論文など自分の進路に関わることなのだから、自主的に学習を進めていくものと思っていたが、どうもそうではないようだ。図書館の本を読んで進路先の分野に関する知識を身に付けることはおろか、よく分からないことをインターネットで調べることもさえない。自分の興味は何かを探り、自分から調

べたり考えたりする習慣を付けていかななくては、自分の進路を切り開いていくことはできないだろう。

このような生徒の現状を打開するきっかけとして、新聞コラム・テレビ番組の要約は有効ではないかと考えている。今後は継続して要約に取り組ませ、他の指導と連携して、自らの進路を切り開く国語力へと結実させていきたい。

付記 本稿は、第44回長野県高等学校視聴覚研究会（2005.10.28，豊科高校）での口頭発表に基づいている。

【注】

- (1) 石黒 (2004) pp.266-71
- (2) 高橋 (2001) pp.35-6 から引用。各文の頭に付けた数字は段落番号を表す。また、原文では漢数字が使われているが、横書きで読みやすくするため算用数字に直してある。なお、高橋 (2001) には「天声人語を半分に削る方法」が挙げられているが、日本語学の観点から見ると疑問が多い。
- (3) 生徒の実力以上に文章の質が格段に向上した感があるが、それは筆者が授業内で例示した文例を、生徒が書き取って自分の文章に組み入れたからだと思われる。
- (4) いくら検証が適切であっても、一つの番組である以上、編集者の視点から社会問題を論じることとなるため、その意味では極度に主観的であるという批判は免れない。だが、今回の授業は情報の正確な把握と要約に主眼を置いているため、メディア情報を批判的に見ることについては今後の課題とした。
- (5) 生徒が作成したメモと要約文には興味深い関連が見られる。メモと要約文の関連については稿を改めて論じることとする。

【参考文献】

- 石黒圭 (2004) 『よくわかる文章表現の技術II 文章構成編』明治書院
高橋昭男 (2001) 『短く書く仕事文の技術 削り方・磨き方・仕上げ方』講談社+α新書
松崎史周 (2004) 「高等学校における現代語文法の扱い」『月刊国語教育』第288号，東京法令出版
松崎史周 (2005) 「国語表現の指導計画と授業の進め方」『横浜国大国語教育研究』第23号，横浜国立大学 国語教育研究室
芳野菊子編 (2003) 『国語科メディア教育への挑戦 第4巻 中学・高校編』明治図書

(まつざき ふみちか 長野清泉女学院高等学校教諭)